

論文審査の要旨

博士の専攻分野の名称	博 士 （ 心 理 学 ）	氏名	岩 佐 康 弘
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論 文 題 目			
<p style="text-align: center;">教員養成課程の大学生におけるアイデンティティ発達 ——教育実習期間を挟んだ縦断研究——</p>			
論文審査担当者			
主 査	教 授	杉 村	和 美
審査委員	教 授	森 永	康 子
審査委員	教 授	森 田	愛 子
審査委員	准教授	梅 村	比 丘
〔論文審査の要旨〕			
<p>本論文は、教員養成課程の大学生のアイデンティティ発達を検討したものである。学生のアイデンティティ発達には、教職を選択するかどうかが及び教師としての適性があるかどうかについて「再考」することが深く関わるとの観点から、アイデンティティと再考の関連を検討する3つの研究を行った。その結果、アイデンティティ発達と再考とは、教育実習を契機に密接に関連すること、アイデンティティの発達軌跡によって、再考の程度や教育実習体験の意味づけのあり方が異なることが明らかになった。</p> <p>論文の構成は、次のとおりである。</p> <p>第1章「本研究の背景と目的」は5節からなる。第1節「学校という文脈におけるアイデンティティ発達」では、自分がどのような人間で、社会でどう生きるのかに関する自覚であるとのアイデンティティの定義を示し、青年期には学校という文脈の中で、その発達を検討する重要性を指摘した。第2節「教職を目指す過程での再考」では、教職を目指すことへの不安である「教職の選択への再考」と、教師として求められる資質・能力への省察である「教師の適性への再考」という2つの再考の概念を紹介した。第3節「アイデンティティ発達と教職を目指す過程での再考」では、先行研究を概観し、アイデンティティ発達と2つの再考が相互に関連することを指摘した。また、この関連は教育実習期間で密接になるとの予測から、この期間に着目して縦断研究を行うことを提起した。第4節「アイデンティティ発達軌跡と教職を目指す過程での再考及び教育現場での適応」では、教育実習期間におけるアイデンティティの多様な発達軌跡に着目し、発達軌跡による2つの再考や適応の違いを明らかにする必要性を指摘した。以上を踏まえ第5節「本研究の目的」では、教育実習期間におけるアイデンティティ発達と再考の関連、及びアイデンティティ発達軌跡による、再考と教育現場への適応の違いを明らかにすることを本研究の目的とした。</p> <p>第2章『「教職を目指す過程での再考」尺度の作成（研究1）」は2節からなる。第1節「尺度項目作成のための記述収集（研究1-1）」では、教職を目指す過程での再考を捉える尺度を作成するため、自由記述によって再考の具体例を収集し質問項目の候補を作成した。第2節「尺度の妥当性・信頼性検討（研究1-2）」では、「教職の選択への再考」と「教</p>			

師の適性への再考」の2因子を想定し、尺度の妥当性・信頼性を検討した。その結果、想定した2因子が抽出され、再検査や外的変数との関連の検討を経て、尺度の妥当性と信頼性が確認された。

第3章「アイデンティティ発達と教職を目指す過程での再考との縦断的関連（研究2）」では、教育実習を挟んだ5ヶ月間で、学生のアイデンティティ発達が、教職を目指す過程での再考とどのように結びついているのかを検討した。交差遅延モデルを用いて検討した結果、アイデンティティ発達と再考は双方向的に関わり、特に教育実習を契機として、不適応的なアイデンティティ発達次元は「教職の選択への再考」と、適応的なアイデンティティ発達次元は「教師の適性への再考」と密接に関連することが明らかになった。

第4章「アイデンティティ発達軌跡による、教職を目指す過程での再考及び教育現場での適応の差異（研究3）」は2節からなる。第1節「量的データを用いた検討（研究3-1）」では、個人に着目して教育実習を挟んだ5ヶ月間のアイデンティティの発達軌跡を特定し、各軌跡者における再考及び教育現場での適応の差異を検討し、第2節「質的データを用いた検討（研究3-2）」では、各軌跡者に面接調査を行い、教育実習をどのように意味づけているのかを検討した。その結果、アイデンティティの発達軌跡によって、再考の程度や教育実習の意味づけが異なり、教育現場での適応の差異にも繋がることが示された。

第5章「総合考察」は3節からなる。第1節「本研究の成果」では、多面的な検討により、アイデンティティ発達と教職を目指す過程での再考の詳細な関連性を解明した点が述べられた。第2節「本研究の学術的・教育実践的意義」では、知見の乏しかった専門職養成課程の学生のアイデンティティ発達の特徴を明らかにした点、及び、特定の専門職に就くことが自明とされている環境下でも、その職を目指すことに不安を感じ、将来の生き方に悩む学生の存在を浮き彫りにした点を意義として考察した。第3節「本研究の限界と今後の課題」では、本研究の限界を踏まえ、今後は教育実習中や就職後も含めた検討を行うこと、また、他の専門職養成課程の学生で今回の知見を確認することの必要性を論じた。

本論文は、次の3点で高く評価できる。

1. 知見の乏しい専門職養成課程の学生に焦点を当て、特定の養成課程にあるからこそ生起する将来の職業や適性に関する再考が、アイデンティティ発達と深く関わることを示した点。
2. 教員養成課程の学生においては、将来の職業や適性に関する再考とアイデンティティ発達が、教育実習を契機として特に密接に関わることを見出し、これらの学生のアイデンティティ発達にとって現場での実習体験が重要であることを明らかにした点。
3. 教職に就くことが自明とされる環境にあっても、教職を目指すことに不安を感じ、アイデンティティに問題を抱える学生がいることを明らかにし、これらの学生が教育現場で適応できるようなアイデンティティの発達を促す支援の必要性を提示した点。

以上、審査の結果、本論文の著者は博士（心理学）の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 4 年 2 月 4 日